



写真/上:宇都宮が建立した浄徳寺。写真/下:近世城下町に築かれた塀

蒲生秀行の近世城下町の基礎づくり

慶長二年(一五九七)一〇月、宇都宮内綱が改易された後、暫定的に宇都宮城を預かったのは、城代としての浅野長政であった。長政は豊臣政権下の政務を分掌した五奉行の首座で、甲斐国二万五〇〇〇石を領していた。

翌三年(一五九八)二月、家臣の内紛がもとで、会津九二万石から宇都宮一八万石に減じられて、蒲生秀行が城主として移ってきたが、同五年(一六〇〇)九月、関ヶ原の戦いが起こり、その論功として秀行は同六年(一六〇一)八月、上杉景勝に最後の会津へ六〇万石を与えられて復帰した。だから秀行の宇都宮在城は約三年半であったが、この間に宇都宮城の修築をすす

蒲生秀行・第一次奥平氏と近世城下町の始まり

現在の宇都宮は、
どのようにして
成立してきたか



栃木県考古学会顧問 嶋 静夫

第23代城主蒲生秀行は、在城3年の間に宇都宮城の修復をすすめたほか、武家屋敷と町人町を区分させるなど近世城下町の基礎をつくった。また、近江国日野商人を城下に居住させ日野町を起し、釜川に御橋を架けた。また、有力譜代大名であった奥平氏は、江戸の北の守りを強化するとともに城内の商業振興を図り、「大膳市」を開いた。

有力譜代大名奥平氏の入部

慶長六年(一六〇二)十二月、徳川家康の長女龜姫(加納殿)の子である奥平家昌が宇都宮一〇万石の大名として移ってきた。奥平家は、家昌の祖父の貞徳、父の信昌以来、家康のもとで戦功を重ね、信昌は武田勝頼を大破した長篠の戦いの功により、龜姫を賜って家昌を生ませたという譜

め、武家屋敷地と町人町の区分をはっきりさせ、城下の出入口を厳重にするため、成高寺・粉河寺・東勝寺などを取り壊した資材を使って、宇都宮西方から城下に通じる街道の出入口(不動口・歌橋口・佐野口・伝馬町口)に警備門の木戸を設けた。

また、蒲生氏の根拠地であった近江国日野出身の商人たちが、宇都宮城下への居住を求めたので、これを認めて東勝寺跡付近に居住させて日野町を起したり、田川沿岸に紺染職人をまとめて紺屋町とした。さらに釜川に城主通行の御橋と庶民用の往還橋を架けるなど、町割りの基礎となった業績を残している。

こうして宇都宮は、蒲生秀行によって近世城下町としての基礎づくりがこに始められたといえる。

代中の譜代である。宇都宮藩主の選任にあたって家康は、最高政治顧問の天海僧正に対し、「宇都宮は関東の戦首にあたる要地であるから、誰に守らせたらよいだろうか」と相談したところ、天海は御座に「御孫の奥平大膳(家昌)が最適」といったという逸話が伝えられている。

当時、奥平には仙台的伊達、会津の蒲生、山形の最上、米沢の上杉、秋田の佐竹など、有力な外様大名が多かったため、宇都宮は江戸城北方の防衛拠点として重視され、有力な譜代大名奥平家昌が配置されたのであろう。これ以降、宇都宮は有力譜代大名の城地となった。

落後、荒廃が目立った興徳寺や光琳寺を再建したり、新たに移原町(現埴田二丁目)に浄徳寺、城内地蔵郡に台陽寺(のち西原)・現新町一丁目へ移転)を建立したりするなど、寺院の復興・建立に努めた。

家昌の近世城下町づくりで特筆されることは、城内の商業振興策である。慶長九年(一六〇四)、大変な賑わいをもっていた奥州街道沿いの大町(現大通り二丁目)に市を開かせた。この市は奥平大膳太夫家昌の官名をとって、「大膳市」といわれ、月六回(五と一〇のつく日)開かれる六斎市であった。家昌は慶長十九年(一六〇四)月、宇都宮城内で三八歳の若さで他界した。子の忠昌



日野町

(幼名千福)は七歳で父の遺領一〇万石を継ぎ城主となった。元和二年(一六二六)三月、忠昌は駿府で病む曾祖父家康を見舞うと、家康は大いに喜び、枕元の印籠と白鳥籠の槍などを与えたという。

忠昌が家康を見舞った翌四月、家康が死去し、日光山に家康廟の造営が始まり、翌三年(一六二七)四月、日光廟はほぼ完成し、同月五日、二代秀忠将軍は初の日光社参のため、宇都宮城に宿泊した。

とここで元和五年(一六二九)一〇月、本多正純が宇都宮一五万五〇〇〇石の藩主として移ってきたので、忠昌(二二歳)は古河二万石の藩主として因替えとなった。これはやがて正純が失脚する一因ともなった。



家昌が再建した春日の御神所

